

中古と中世文学における竜宮訪問のモチーフの変遷

—浦島伝説における異界の変容を中心に—

トムシュー・アダム*

1 はじめに

竜宮訪問を主題とした物語 (narrative) は、日本文学史上、浦島伝説をはじめ、現代に至るまで頻繁に見られる。竜宮訪問の物語の主人公たちは、人間界を後にし、いわゆる異界へ出発し、そこで竜王やその娘という異界からの登場人物に出会い、呪具をもらい、帰還する。この基本的な物語の構造は、様々な物語に認められながら、物語の設定、登場人物、与えられた呪具やその機能等に、ある程度の相違が存在しており、また、物語の位置づけや語りの技法も、当然ながら、様々である。

上記に言及した浦島伝説は、今日、浦島太郎が乙姫と竜宮を訪問するという展開で一般的に知られていると思われる。しかし、浦島伝説に竜宮が物語の設定になっている最古の資料は、やや後期の室町時代の御伽草子であり、それ以前の資料に見られる浦島の訪問先は「常世」あるいは「蓬莱」であり、「竜宮」が見られないことに注目される。

そこで、本稿は、浦島伝説において、なぜ「常世」あるいは「蓬莱」が「竜宮」と混同されるようになったのか、という点を追及したものである。具体的にここで取り上げるのは、浦島子伝説の最古の資料とされる『日本書紀』、『萬葉集』巻九第1740、『丹後國風土記』逸文『筒川の嶼子』との3話と、『今昔物語集』巻三第十一話・巻十六第十五話、『古事談』巻五第三十四話、『太平記』巻十五「竜宮城鐘の事」との中古と中世の資料にお

ける竜宮訪問の説話の4話（いずれも浦島伝説ではない）と、浦島伝説で竜宮が初めて現れる御伽草子の『浦島太郎』、合計8話である。

物語の基本構造の予備的な比較には、V・ブロップの『昔話の形態学』（1928）で提案された物語の機能の分析方法を採用する。次に、物語の登場人物、呪具、設定との三つのカテゴリーを中心に比較する。その結果、顕著な類似性が明らかになるだろう。それを踏まえ、浦島伝説にみる異界がなぜ「蓬莱」あるいは「常世」から「竜宮」に変容していくのか、という問題を認知意味論を採用して解明することを試みる。

2 浦島伝説と竜宮訪問との諸物語

浦島伝説を記載した資料は、上代の『日本書紀』、『丹後國風土記』逸文、『浦島子伝』、『萬葉集』をはじめ、多数残っている。平安時代以降も、『続浦島子伝記』、『扶桑略記』、『古事談』等で浦島伝説が見られ、和歌文学にも浸透していく。特に初期のものは、中国の神仙思想の色彩が濃く、亀、飛翔、不老不死等の道教的要素が後の資料にも認められる。また、巖紹盪氏（1995）が指摘している通り、『萬葉集』より更に古い『浦島子伝』は、題材や文体の面で中国唐代の「伝奇」文学から強い影響を受けており、浦島物語の形成において外的要素の重要性が窺われる。

「竜宮」は、『妙法蓮華経』をはじめ、多数の経典に見られ、仏教文化と共に日本へ伝わってきたと考えられる。日本における「竜宮」の最も古い

*カレル大学大学院生

資料とされるのは、九世紀に成立した最初の勅選詩集『凌雲集』であり、後に美しい竜宮が薬師寺の模範になったという記載が、『観智院本三宝絵』に次ぐ『今昔物語集』巻十一第十七話にある。また、『六度集経』と『報恩経』を出典とする『三宝絵詞』上巻第四話にも竜宮訪問のモチーフが見られ、『今昔物語集』巻三第十一話は『大唐西域記』の説話に基づいているといった経緯から、竜宮のイメージが大陸からの影響の下で発展したことが分かる。

室町時代に成立した御伽草子『浦島太郎』以前の資料においては、浦島の訪問先としての「竜宮」の記事が見られない。「竜宮」が一般的になったのは、江戸時代中期とされており、江戸時代末期まで浦島の訪問先は「蓬莱」である、という意識が残っていたと考えられている（林 2006: 115）。なお、御伽草子『浦島太郎』にも、「蓬莱」と「竜宮」との混同が見られる。浦島が亀姫と夫婦の誓いをかわしてから、亀姫は、「これは龍宮城と申す所なり」¹という。しかし、物語の結末に、玉手箱を開けた浦島は「鶴になり、蓬莱の山にあひをなす」という記事がある。おそらく、前者の「龍宮城」と後者の「蓬莱の山」は、同じ場所を指すものだろう。

実際のところ、「竜宮」と「蓬莱」は、より早い段階で混同されていたとされる。巖氏（1995: 65f）が述べているように、古代中国では、「龜」や「龍」はいずれも崇拝の対象であり、同一視されていたため、『浦島子伝』の「蓬莱仙宮」もおそらく「龍宮」として捉えられ、亀の変身が「龍女」として解釈されていたであろう、という。また、『釋日本紀』巻十二に言及される、既に失われてしまった『天書』第八「(雄略天皇)廿二年秋七月、丹波の人水江浦島子入海龍宮、得神仙」という記事から、浦島子が「龍宮」を訪問するという意識が奈良時代末期にあったと言ってよい。しかし、後の数世紀に浦島伝説の資料に「竜宮」の記事が見られなくなることから、その意識が潜在的

にあったとしても、一般的にならず、忘れられていただろうと考えられる。

『浦島太郎』に「竜宮」が設定されるのは、直接的な影響よりも、むしろ浦島伝説とは周辺的な関連性を持っている（あるいはその可能性のある）、竜宮訪問のモチーフが現われる諸物語からの間接的な影響があったのではないだろうか。確かに、かかる影響を証明することは不可能だろう（更に前者と後者が相互に影響し合ったことも十分考えられる）が、その可能性を前提に、ここで浦島伝説の資料を竜宮訪問の資料と比較し、その共通点について考察する。

まず、前節で紹介した浦島伝説と竜宮訪問の資料の8話に共通している構造が認められるか否かとの分析を行う。

基本的な構造の類似性を確認するために、ここでは『昔話の形態学』（1928）でプロップが提案した方法と用語を採用することとする²。プロップによると、昔話の基本的な構成分子は、いわゆる「機能」である。機能とは、「物語の展開の面から特定された登場人物の行動のこと」である（Propp 2008: 26）。昔話における機能は、数が限られており、一定の機能は、異なる物語において名前や特質が異なる登場人物によって行われる可能性があるが、物語の詳細が異なっても、機能自体は変わらない。機能は、述語で表現されており、構造を決定する（ibidem: 99）。

ここでは、まず、対象の8話における機能を特定し、抽出された型を記号で記載することを試みる³。それを踏まえ、それぞれの型を比較する。

以下に、『丹後國風土記』逸文「筒川の嶼子」の概要を述べ⁴、括弧に登場人物の機能を記す。

筒川の村に、水江の浦の嶼子（導入、 α ）がいた。ある日、釣りに（欠如、a）海に出た（出発、 \uparrow ）。三日三夜が経過したが、一匹の魚も釣れず、ただ妙な亀を釣り上げた（呪具の獲得、F）。亀が突然乙女に変身し、仙人であることを打ち明け、嶼

の物語群において、呪具は主人公に現世利益を及ぼし、めでたいものとして描かれている。『今昔物語集』巻三第十一話では、主人公が箱に納めた剣で王を殺して即位する、また、『今昔物語集』巻十六第十五話の主人公は、箱に入っていたいくら割ってもなくなるといふ魔法の「金の餅」のおかげで裕福になる。『太平記』の主人公にも、竜王が「巻絹一疋・鎧一領・頸結俵一つ・赤銅の撞鐘」をくれるが、「頸結俵」からいくら取ってもなくなるとあるように、上記の「金の餅」と同様の機能を持っていると言ってよい。また、御伽草子『浦島太郎』において、浦島が玉手箱を開けて鶴になったおかげで、亀と再会できるという展開は、それ以前の浦島伝説の結末と対照的であり、めでたい結果になる点では、むしろ中古と中世の竜宮訪問の物語に近いとすることができる。

「常世」あるいは「蓬莱」は、海の彼方（『日本書紀』、『萬葉集』、『丹後國風土記』）にある。また、「竜宮」は、池の底（『今昔物語集』巻三第十一話・巻十六第十五話）、海の底（『古事談』）、湖の底（『太平記』では具体的に琵琶湖の底）に位置され、いずれも水をたたえているところとの関連がある。『浦島太郎』の「竜宮」は、海の彼方にある。すべての物語に、人間界と異界が明確に区別されている。主人公たちは、異界空間へ主導権を握っている超自然的登場人物に案内される。更に、『丹後國風土記』や『今昔物語集』巻十六第十五話では、人間界と異界との境界で主人公が寝かせられる描写が見られる⁶。

最後に、「常世」あるいは「蓬莱」と「竜宮」の美しい楽地としての描写は、類似しているところが多い。『丹後國風土記』逸文の「蓬山」は、「その地は玉を敷けるが如し。關台はうてな 隙あきらか 映えは 倭堂なかのは玲瓏てりかかやけり。目に見ず、耳に聞かず。」と描かれている。『今昔物語集』巻三第十一話に、「(前略)七宝ノ宮殿有り。金ノ木尻、銀ノ壁、瑠璃ノ瓦、摩尼珠ノ瓔珞、栴檀ノ柱也。光ヲ放ツ浄土ノ如ク也。」等とあり、巻十六第十五話の龍宮の宮殿も、

「皆、七宝ヲ以テ造レリ。光り耀ク事無限シ。」等と描写されており、主人公にとって「極楽」のようである。『太平記』にも同様の描写が見られ、なお『浦島太郎』の「竜宮」も、「銀の築地を築きて、金の叢を並べ、(後略)」と描かれている。

3 認知意味論からみた「蓬莱」と「竜宮」との混同

以上、浦島子伝説と竜宮訪問をモチーフとした物語との共通点を確認したが、なぜ竜宮が浦島子伝説にみる異界空間（常世あるいは蓬莱）を連想させるのか、また、なぜ御伽草子の『浦島太郎』に「竜宮」が現われてくるのか、という疑問は、いまだ完全に解決できなかつたと思われる。この連想を可能にしたのは、いかなる仕組みだろう。

それを解明するために、ここで認知言語学の理論に注意を向け、特に認知言語学の意味論の根本的な前提になっている百科事典的意味 (encyclopedic meaning) を紹介する。認知意味論によると、語は、概念知識へのいわゆるアクセスポイントであり、百科事典的意味とは、「その語から連想される（可能性がある）知識の総体」のことである（舩山 2014: 72）。要するに、語の意味は、背景知識の基盤（文脈）がなければ成立しないという。このアプローチを代表するのは、1970・80年代に発展したCh・フィルモアのフレーム意味論とR・レナカーが提案したドメインの理論である。

語から連想される知識の総体は、無秩序な塊りではなく、特定の構造をなしていると考えられている。基本的には、ある語から必ず連想されるという中心的な知識と、特殊な文脈でしか連想されないという周囲的な知識との二つのカテゴリーに分けられる (Langacker 2013: 38-42)。語の意味は、概念的基層 (conceptual substrate) を基にして成立し、また、この概念的基層は、直前の談話によって引き起こされた概念、物理的・社会的・文化的文脈、他の関連する知識のドメインから構

成されている。比較的多数の読者による物語の解釈において特に重要なのは、いわゆる習慣的知識 (conventional knowledge) である。習慣的知識とは、言語共同体が広く共通している知識のことであり (Evans, Green 2006: 217)、その共通性が高ければ高いほど知識がより中心的になる。

フィルモアが提案したフレーム (frame) とは、概念のレベルで長期記憶に保存された知識の構造 (あるいはスキーマ化された経験) のことである (Evans, Green 2006: 222-230)。特定の語を理解するために、それ相応のフレームの知識の構造全体が必要とされる。フレームは、その成分がいかなる相互関係に入るのかを決定する。例えば、「訪問者シナリオ」のフレーム⁷は、訪問者・主人・訪問先等のフレーム成分 (frame elements) で構成されており、「訪問する」の意味が成立するためには、訪問者が訪問先の主人と会うという関係の背景知識が必要である。

ラネカーのドメイン⁸の理論は、フレーム意味論との共通点が多い。ここで注意しておきたいのは、ラネカーによると、概念内容は、ほとんどの場合、複数のドメインの束、いわゆるドメイン・マトリックス (domain matrix) から構成されているという点である。つまり、ドメインあるいはフレームは孤立せずに、相互関係の複雑な網を成している本質を持っているという点である。

概念知識 (ドメイン、フレーム) は、物語と同様の構造を成していることが多く、この特質が物語論的研究にも意識されるようになったのだと思われる⁹。即ち、物語は認知の機能でもあると言ってよいだろう。我々人間が体験している物事は、この認知能力によって秩序立てて捉えられる。上記に挙げた「訪問者シナリオ」のフレームは、「シナリオ」という表題から推測できるように) 明確に時空的な構造があり、行為者 (訪問者) が普段住んでいるところを後にし、何らかの目的で特定の存在 (主人) のところを訪問する。その目的を果たしたら、また元の位置に帰還する。当

然ながら、浦島伝説と竜宮訪問の物語は、このフレームに相当する。

では、「常世」あるいは「蓬莱」と「竜宮」との混同が、なぜ起こっているだろう。その理由は、「常世」または「蓬莱」と「竜宮」との語彙単位のフレームが類似しているからであると考えられる。表2で、対象の8話のコーパスに基づいて (極めて限られたコーパスではあるが)、「竜宮」という語彙単位のフレーム成分を特定することを試みた¹⁰。いうまでもなく、ここで提案したフレーム成分のリストと成分の具体例は、網羅的ではない。

「常世」あるいは「蓬莱」の語彙単位フレームに、おそらく同様のフレーム成分が認められると思われる。その重ね合わせによって、概念内容の混同が起こってしまい、浦島太郎が「竜宮」を訪問することになったのではないか。

フレーム成分	内容の具体例
建物	門、楼、宮殿等がある
デスクリプター	浄土・極楽のよう、光り輝く、時間の経過が人間界より遅い
機能	龍王やその娘が住んでいる、女に案内される人間が訪問する
材料	七宝、金、銀、瑠璃等
通称	竜宮、蓬莱、常世等
位置	海の彼方・海 (湖、池) の底

表2 「竜宮」の語彙単位フレーム

4 おわりに

以上、浦島伝説の資料における「蓬莱」と「竜宮」との混同の根源を解明することを試みた。本稿では、上代の浦島子伝説、中古と中世における竜宮訪問の物語と、室町時代に成立した御伽草子『浦島太郎』を対象に、それぞれを比較し、その共通点について考察した。位置づけが大いに異なるこれらの物語に、顕著な構造上の類似点が認められ、物語の設定や登場人物にもある程度一貫し

た方向性が見いだせると考えられる。浦島伝説と竜宮訪問の物語の資料が増えていくにつれて、これらの物語に関わる習慣的知識も膨らんでいく。この過程の説明を認知意味論に求め、「蓬莱」と「竜宮」との混同は、いずれから連想される背景知識によって意味が重ね合ってしまった結果である、という見解を提案した。

しかし、本稿での論考はまだ不十分であり、様々な課題が残っている。殊に、より広い範囲の資料を調査対象に含む必要があると思われる。更に、ここでは主に物語の内容を中心に考察したが、焦点化といった語りの技法を検討する意義も十分あると考えられ、今後の課題としたい。

注

- 1 御伽草子『浦島太郎』の引用は、大島建彦校注・訳1976『御伽草子集』日本古典文学全集36による。
- 2 但し、プロップの分析方法は、いわゆる魔法の昔話の分析に当てはまるものとして導入された一方、本稿の対象とした資料は、魔法の昔話ではないため、プロップが抽出した構造の原則に逆らう可能性が否定できない。
- 3 ここで、プロップ (1987: 345-356) の付録 I (機能と記号の一覧) を参照。
- 4 植垣節也 (1997: 473f.) の現代語訳を参照。
- 5 とはいうものの、『今昔物語集』巻十四第二十九話にあるように、竜は仏法の守護神でもあり、竜の捉え方は様々であった。
- 6 その意味に関しては、三浦 (1976) が詳細を述べている。
- 7 フレームのデータは、カリフォルニア大学で開発されている、現代英語におけるフレームと語彙単位のデータベース、FrameNetによる。詳しくは、<https://framenet.icsi.berkeley.edu/fndrupal/> (2018年11月アクセス) を参照。
- 8 認知ドメインとは、ある言語表現が内包する・連想するすべての概念内容の認知領域のことである。
- 9 Herman (2013) はその一例である。
- 10 ここで、とりわけFrameNetの語彙単位データベースの「castle.n」を参考にした。データは<https://framenet.icsi.berkeley.edu/fndrupal/luIndex>でアクセスできる。

参考文献

- 植垣節也校注・訳. 1997. 『風土記』(新編日本古典文学全集; 5). 小学館.
- ウラジーミル・プロップ. 1987. 『昔話の形態学』. 白鳥書房.
- 大島建彦校注・訳. 1974. 『御伽草子集』(日本古典文学全集/秋山虔 [ほか] 編; 36). 小学館.
- 川端善明, 荒木浩校注. 2005. 『古事談; 続古事談』.(新日本古典文学大系; 41). 岩波書店.
- 小島憲之, 木下正俊, 東野治之校注・訳. 1994. 『萬葉集』.(新編日本古典文学全集). 小学館.
- 小島憲之 [ほか] 校注・訳. 1994. 『日本書紀』(新編日本古典文学全集; 2-4). 小学館.
- 今野達校注. 1993. 『今昔物語集』(新日本古典文学大系). 岩波書店.
- 巖 紹臺. 1995. 「日本古《伝奇》『浦島子伝』の研究: 日中文化における神話から小説への軌跡についての研究(その一)」。『日本研究: 国際日本文化研究センター紀要』12. 33-72. 国際日本文化研究センター.
- 長谷川端校注・訳. 1994. 『太平記』.(新編日本古典文学全集). 小学館.
- 林晃平. 2006. 「《龍宮》という名の異郷とそのイメージ——御伽草子『浦島太郎』における異郷表現の変遷」。『国文学』71(5). 115-124. 至文堂.
- 馬淵和夫, 国東文麿, 稲垣泰一校注・訳. 1999. 『今昔物語集』(新編日本古典文学全集). 小学館.
- 三浦佑之. 1976. 「浦島子伝承における異次元: 物語発生論への一試論」。『成城國文學論集』8. 125-170. 成城大学.
- 初山洋介. 2014. 『日本語研究のための認知言語学』. 研究社.
- 森正人. 1999. 「聖なる毒蛇/罪ある観音——鷹取救済譚考」。『国語と国文学』76(12), 26-39. 至文堂.
- Evans, Vyvyan, Green, Melanie. 2006. *Cognitive Linguistics. An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- FrameNet. <https://framenet.icsi.berkeley.edu/fndrupal/> (2018年11月アクセス)
- Herman, David. 2013. *Storytelling and the Sciences of Mind*. Cambridge: The MIT Press.
- Langacker, Ronald W. 2013. *Essentials of Cognitive Grammar*. New York: Oxford University Press.
- Propp, Vladimír Jakovlevič. 2008. *Morfologie pohádky a jiné studie*. Jinočany: H & H.